

20 世紀中期のブルゴーニュ地方モルヴァンの音声特徴と音声分布の分析

- 2 つの言語地図を用いて -

- L'analyse de distributions de la prononciation morvandelle
en Bourgogne au milieu du 20^{ème} siècle
- Avec des données des deux atlas linguistiques -

伊藤 玲子

ITO Reiko

東京外国語大学博士後期課程

Doctoral Program, TUFS

ふらんぼー(Flambeau) vol.45 2019, p.87-105.

原稿受理 2019-11-25 ; 最終版 2020-02-01

抄録

1960 年代のブルゴーニュ地方では、ほとんどの地域で俚言は衰退していたが、ほぼ中央に位置するモルヴァンでは住民が日常的に俚言を話していた(Taverdet 1973)。本研究では、20 世紀中期に調査が行われた 2 つの言語地図をコーパスとして、モルヴァンにおける音声特徴と音声分布を分析することを目的とする。分析の結果、モルヴァンでは同一の語源が同一の音声変化を経ていないことがわかった。また、音声分布には地理的特徴が見られた。

Résumé

Dans les années 60, il n'y avait plus de patois en Bourgogne, excepté dans le Morvan (Taverdet 1973). Notre recherche a pour but d'analyser la caractéristique phonétique et la distribution phonétique dans le Morvan au milieu du XX^{ème} siècle avec les données des deux atlas linguistiques. Nous avons compris que les mots avec la même étymologie n'ont pas suivi le même changement phonétique et qu'il y avait des particularités géographiques dans la distribution phonétique.

キーワード

モルヴァン, Morvan, ブルゴーニュ地方, 音声分布, 方言

© ふらんぼー Flambeau 45 (2019) pp.87-105.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



はじめに

北フランス南東部に位置するブルゴーニュ地方¹のほぼ中央にあるモルヴァン高地(以下モルヴァン)は、ブルゴーニュ地方の4県(ヨンヌ県、コート＝ドール県、ニエーヴル県、ソーヌ＝エ＝ロワール県)を跨ぎ、東西約60km、南北約100kmの広さを持つ自然豊かな小高い土地である。1970年にモルヴァン地方自然公園²に指定された。かつてモルヴァンはいくつかに分かれ、それぞれ隣接する周辺地域の管理下にあった(Richard:153、291)ことから、モルヴァンは周辺から影響を受けてきた。言語的な観点では、Taverdet(1973:322)やRégnier(1979a:185-186)はモルヴァンは保守的であると指摘する。1960年代のブルゴーニュ地方ではほとんどの地域で俚言が廃れていたが、モルヴァンではまだ俚言が生き活きと話されていた(Taverdet 1973:320-325)。Régnier(1979a:27-28)によると、モルヴァンは地形的に道路建設が容易ではなかったことから幹線道路の敷設が19世紀初頭まで遅れ、それまではローマ時代以来の道しかなかく、文明の導入が遅かったという。彼は、モルヴァンはアルカイックと多様性の二つの側面を持っていると説明する。



図1 フランス(Google Map)



図2 ブルゴーニュ地方³

1. 先行研究

モルヴァンに関する言語学的研究を紹介する。

1.1. Régnier(1979a)、Régnier(1979b)、Bertrant(1979)

¹ 2015年まで使用されていた地方行政区分名。行政区分の再編により、2016年にブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏に統合された。ブルゴーニュ地方の大部分はオイル語圏内で、最も南の地域はフランコプロヴァンス語圏内にある。

² フランスは1967年以降に自然保全のため、次々に公園を指定・整備してきた。

<https://www.parcs-naturels-regionaux.fr/article/histoire>、(2019年7月26日閲覧)

³ <https://ja.wikipedia.org/wiki/ブルゴーニュ地域圏>

Claude Régnier は 1914 年にモルヴァンの南東約 4 キロにある村で生まれ、幼少時は同居していた祖母と俚言で話していたという。その後、母親に俚言を話すことを止めるように言われ、近くの町で話されていたフランス語⁴に似ていると言われる言葉で話すようになった。彼はソルボンヌ大学で学び、1982 年までパリ第 4 大学の古フランス語の教授として教鞭をとった。

1948 年から 1962 年までの夏休みに、彼はモルヴァンで言語調査を行った。インフォーマントとして 1900 年以前に誕生した 50 歳以上の農民を選び、調査は 112 地点に及んだ。調査結果を基に 498 枚の言語地図を作製し(Régnier 1979b) (以下 PM)、音声・形態・語彙についての分析をまとめた(Régnier 1979a)。Bertrant(1979)は、PM に記された音声表記を、フランス語の伝統的な綴り字に書き換えて、県ごとに見られる形態をまとめたものである。

Régnier(1979a:133-134)は、モルヴァンには1つの俚言があるのではなく、モルヴァン全体で共通の特徴というものはないと述べている。それは、周囲の影響を受けていたことが原因であるという。モルヴァンでは、西に隣接するニヴェルネ地方⁵特有の母音間の子音の弱化(特に r)、非鼻母音化、二重母音化が見られた。また、ブルゴーニュ地方の特徴である口蓋化・唇音化・二重母音化なども観察された。ブルゴーニュ地方の影響は強いが、影響の程度は単語によって異なっていたという。Régnier(1979a:185-186)によると、単語はモルヴァンの地域によって別々に育まれた。その理由は、モルヴァンが政治的にも精神的にも統一を欠いているからであると言う。14 世紀半ば以来受けてきたフランス語の圧力は、モルヴァン全体に均一には及んでいなかった。道路はフランス語の拡散に一役買い、小さな都市や大きな村には俚言話者はほとんどいなかった。反対に、森林に覆われたモルヴァン北西部や、住民たちが過去の栄華に誇りを持っているオートン⁶を中心とする地域、オリジナリティに固執するシャトー＝シノン⁷では、俚言が維持されていた。モルヴァンは周囲の影響を受け入れてきたが、同時に保守的である。

1.2. Taverdet (1973)

Gérard Taverdet は方言学、地名学が専門の言語学者で、ディジョン大学の名誉教授である。1960 年代にブルゴーニュ地方の 119 地点で行われた調査データをもとに、ブルゴーニュ地方言語民族誌学地図集 Atlas linguistique et ethnographique de Bourgogne (Taverdet 1975, 1977, 1980) (以下 ALB) を完成させた。地図は 1,800 枚に及ぶ。インフォーマントは年配の農民であるという(Taverdet 1973 : 319)。

ALB に基づいて、Taverdet (1973) は1960 年代におけるブルゴーニュ地方の俚言の使用状況や言語的特徴を分析している。Taverdet(1973 : 320-325)によると、1960 年代に

⁴ 本論文では、フランス語は標準フランス語を指す。

⁵ パリ盆地の南東縁辺部で、ほぼニエーヴル県とヨンヌ県、シェール県の一部に相当する旧州。中心都市はヌヴェール(大賀他 1988:1646)

⁶ モルヴァンの南東に位置する町。

⁷ モルヴァン南西部にある町。

おけるモルヴァンとブルゴーニュ地方南東部にあるプレスは、もともと俚言が話されている地域である。この 2 地域では、住民は俚言とフランス語を話し、俚言単独話者は存在しなかった。また世代による違いが認められた。60 歳以上の人にとって俚言は母語であるが、放棄しようとしていた。40-60 歳の人々は村の中で俚言を頻繁に話していたが、ボキャブラリが乏しかった。学校卒業後に働くために故郷を離れることから 10-30 歳の住民はほとんどいなかった。10 歳以下の子供たちは、学校でも家庭でも俚言をよく話していた。

Taverdet (1973 : 322)によれば、モルヴァンは言語学的に保守的で、語彙・形態・音声的に独自の発展をしてきた。音声の例を挙げると、フランス語では /r/ > /z/ > φ という音声変化が見られるが、モルヴァンでは一貫してはいないが、/r/ > /z/ > φ > /r/ という /r/ の復活が見られる。また、モルヴァンでは強い口蓋化が広がっている。例えば [z] > [j] (maison[ma :jõ]、église[ezi:j]、cerise[cri:j]) や [s] > [ʃ] (cuisse[tʒo:ʃ]) が観察される。

Taverdet (1973 : 317-327) は、ブルゴーニュ地方の各地域は隣接する周囲の地方との関わりが見られることから、ブルゴーニュ地方の方言を定義することは困難であると述べる。1970 年頃は、人口 100 万人のうち俚言話者は 5 万人 (5%) で、若者を中心に知らない人が増えている。

2. リサーチクエスチョン

Régnier (1979a : 133-134) はモルヴァンの俚言には共通した特徴はないと述べていることから、モルヴァン全体の音声の詳細を明らかにする必要があると考えた。そこで、本研究では以下の 2 つのリサーチクエスチョンを立てた。

- ① 同一の語源から同一の音声変化を経たのか、あるいは異なる音声変化を経たのか？
- ② 音声変化を被った地域はどこで、どのような地理的分布の特徴があるか？

語源から変化した音声と、音声変化の地理的分布を分析することは、モルヴァン全体の音声特徴を知る上で重要である。モルヴァンにおいて音声変化を被った地域の地理的分布の観察は、先行研究では行われていない。また、2 つの言語地図 ALB と PM のデータを用いた音声分析は現在まで存在しない。そこに本研究のオリジナリティと研究意義がある。

3. 方法

3.1. コーパス

Taverdet (1973 : 320-325) は 1960 年代のモルヴァンでは俚言がよく使われていたと述べていることから、20 世紀中期に調査された以下の 2 つの言語地図をコーパスとする。

- PM (Les Parlers du Morvan (Régnier 1979b)) :
調査時期 1948-1962 年、調査地点 (モルヴァン) 112、地図 498 枚
- ALB (Atlas linguistique et ethnographique de Bourgogne (Taverdet 1975, 1977, 1980))

調査時期 1960 年代、調査地点 (ブルゴーニュ地方) 119、地図 1,800 枚

両言語地図は非常に近い時期に調査された。また、どちらも中高年の農民をインフォーマントとしている。

3.2. 分析対象地点

地点	地点番号		地名	地点	地点番号		地名
	PM	ALB			PM	ALB	
A	13	75	Glux	F	70	79	Anost, Bussy ⁸
B	34	70	Montreuillon	G	80	30	Saint-Martin-de-la-Mer
C	48	65	Saint-Brisson	H	83	27	Thoisly-la-Berchère
D	51	62	Saint-Martin-du-Puy	I	101	54	Saint-Léger-Vauban
E	59	83	Saint-Prix	J ⁹	108	53	Fontenay-près-Vézelay

表 1 分析対象地点

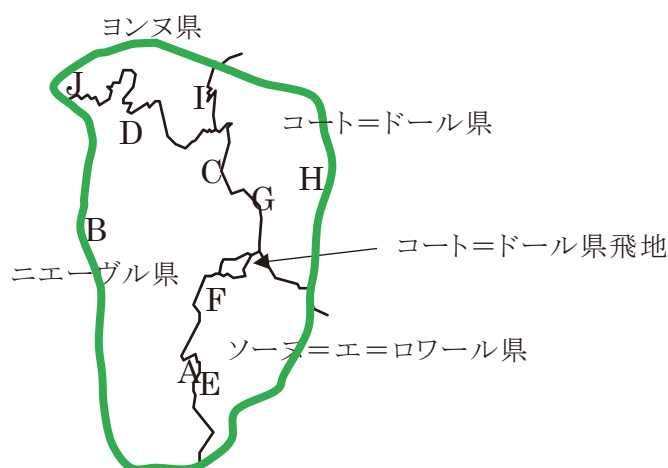


図 3 分析対象地点とモルヴァン

PM の調査地点 1～112 のうち、最南端の 1～4 と最北端の 111、112 のデータは全地図で記載がない。それ以外の地点 5～110 の範囲内に、ALB の調査地点 12 地点が入っていた。ALB の 12 地点のうち、10 地点は PM の調査地点とちょうど重なっていたことから、本研究はこの 10 地点を分析対象とする。両コーパスで重なっている地点を分析対象にすることで、各地点につきインフォーマント 2 名の音声データを比較することが可能となった。各地点には A～J の記号を付けた。表1は、地点 A～J と対応する両コーパスの地点番号と地名

⁸ PM は地点70として 2 つの町 Anost, Bussy (Anost の南西 1,5 キロ) で調査している。ALB の地点 79 は Anost。

⁹ 地図記号 J で示す Fontenay-près-Vézelay は、Régnier がモルヴァンと呼ぶ範囲から約 5km 西側にあるが、両コーパスで共通して調査されていることから、本研究では J も分析範囲に入れた。

を示す。

図 3 は地点 A～J を示した地図である。緑色の線で囲まれた地域は PM の調査地域を表す¹⁰。本研究ではこの範囲をモルヴァンと呼ぶ。黒い線は県境を表す。

3.3. 分析対象地図

本研究では分析する単語を便宜的に名詞と形容詞に絞った。2 つのコーパスで共通する地図 266 枚のうち、同じ語源¹¹ を単語の中で音節的に同じ位置に持つ以下の 13 単語について調査した地図を選び出した。これらを分析対象とする。

(1) CA

位置	地図	語源	地図番号	
			PM	ALB
語頭の CA-	chaise 「椅子」	lat. CATHĒDRA	375	1419
	char 「4 輪荷車」	lat. CARRU(M)	93	1268
	chemin 「道路」	gaul.CAMMĪNU(M)	15	238
語末の -CCA	bouche 「(人の) 口」	lat. BŮCCA	432	1330
	vache 「雌牛」	lat. VACCA	239	1026

表 2 語源に語頭の CA-/語末の-CCA を持つ分析対象地図

(2) 語末の-SIONE(M)

地図	語源	地図番号	
		PM	ALB
maison 「家」	lat.MANSIONE(M)	370	1385
toison 「羊毛」	lat.TONSIONE(M)	268	1119

表 3 語源に語末の-SIONE(M)を持つ分析対象地図

¹⁰ PM でモルヴァンと呼ばれる地域は緑で表す範囲より南北に長い。

¹¹ FEW(Französisches Etymologisches Wörterbuch) を参照した(cf. 参考文献)。略語の意味は以下の通り。lat.: ラテン語、gaul.: ガリア語、germ.: ゲルマン語、anfrk.: 古フランク語。

(3) 語頭の GL-

地図	語源	地図番号	
		PM	ALB
glace 「氷」	lat. GLACIE(M)	429	84
gland 「殻斗果(ブナ科植物の実を覆う椀状のもの)」	lat. GLANDE(M)	322	546

表 4 語源に語頭の GL-を持つ分析対象地図

(4) 語頭の PL-

地図	語源	地図番号	
		PM	ALB
pluie 「雨」	lat. PLŮVIA	423	35
plume 「羽毛、ペン」	lat. PLŪMA	288	1187

表 5 語源に語頭の PL-を持つ分析対象地図

(5) 語頭の BL-

地図	語源	地図番号	
		PM	ALB
blanche 「白い」 女性形単数	germ.*BLANK	240	867
blé 「小麦、穀類」	anfrk. *BLĀD	171	389

表 6 語源に語頭の BL-を持つ分析対象地図

3.4. 分析手順

【単語の観察】

まず、フランス語の場合の音声変化を記す。文献に « r » あるいは[r]と載っていたものは便宜的に[r]と記したが、実際の音声を表すとは限らない。次に、必要な場合には、形態がどの単語を表しているか考察する。そして、語源から変化した音声は 2 つのコーパスで一致している地点を観察する。

【同じ語源を持つ単語グループ¹²の分析】

2つのコーパスの音声を観察して、同一の語源を持つ単語グループは各地点で同一の

¹² 本研究で言う、語源に語頭の CA-を持つ単語グループとは、chaise, char, chemin を指す。

音声変化を経たのかどうか、次の基準で判断した。

①ある地点では、語源から変化した音声は全て同じ場合

例：表 8 の地点 C では、語源-CCA から変化した音声が全て[s]と発音されていた。

→この地点では、-CCA の単語グループは同一の音声変化を経て[s]になった、と判断した。

②ある地点では、語源から変化した音声が、1 つの例外以外は全て同じ場合

例：表 9 の地点 H では、toison の ALB は語源-SIONE(M)から変化した音声が[ʒõ]であるが、それ以外は全て[jõ]と発音されていた。

→この地点では、-SIONE(M)の単語グループは概ね同一の音声変化を経て[jõ]になった、と判断した。

③それ以外の場合

例：表 7 の地点 E では、語源 CA-から変化した音声として[ʃ][sj][s]が見られる。

→この地点では、CA-の単語グループは一貫した音声変化を経ていない、と判断した。

次に、単語グループの音声分布を表す地図を作製する。●(色は表の凡例を参照)は

①②の地点を表し、地図記号 A~F は③の地点を表す。

4. 分析

以下の表の見方を説明する。横列は地図を表す。縦列の上と下がおおよそ北と南になるように、10 地点を縦に並べた。音声記号 Alphet Rousselot-Gilliéron で書かれている言語地図上の形態は、Le projet SYMILA¹³ による音声対応表を用いて IPA 表記に書き換えた。例えば、表 7 を見ると、地図 chemin の地点 A の欄は上下段に分かれ、それぞれ音声記号が記入されている。上段は PM、下段は ALB の音声を表す。地図 char の地点 I のように上下段に分かれていない場合は、2つのコーパスで全く同じ形態が記載されていたことを表す。地図 chaise の地点 B は、PM で[ʃe:]、ALB で2つの形態[ʃe:][sɛl]が記載されていたことを表している。コーパスに形態が記載されていない場合は、記号 « - » を記入した。語源から変化した音声は色で網掛けして分類した(各表の凡例を参照)。

単語グループの音声分布を表す地図を観察して、音声分布を分析する。

(1) CA

a. 語頭の CA-

【単語の観察】

chaise

Zink (1991:200)によれば、ラテン語 CATHĒDRA は、以下のように変化したという。ラテン語 CATHĒDRA>2 世紀 [katēdra]>3 世紀 [katīēdra]>5 世紀 [kʰadiēdra]>[ʃʰadiēdra]>6 世紀 [ʃaðieðra]>7 世紀 [tʃaðieðrə]>11 世紀 [tʃaierə]>12-13 世紀 [tʃajerə]>13 世紀

¹³ 音声表記 Alphet Rousselot-Gilliéron と IPA 表記の対応について書かれている。トゥールーズ大学の Patrick Sauzet によって考案された。http://symila.univ-tlse2.fr/alf/notation_phonétique

[ʃajerə]>近代フランス語 chaire>[ʃɛ:z]¹⁴。

表 7 で見られる語末が[-z]の形態[ʃɛ:z][ʃɛz][sje:z]は、chaise を表す。地点 I と F の ALB の形態[ʃɛ:r]は、chaise に音声変化する前段階の chaire、あるいは、モルヴァンで見られる[z]>[r]という変化(Régnier 1979:86)の結果である。いずれにせよ、[ʃɛ:r]は chaise を表している。次に[ʃɛ:l][ʃɛ:][se:][sɛl][se:l]について考察する。歯茎摩擦音[s]と後部歯茎摩擦音[ʃ]の調音点が近いことから、[s]と[ʃ]の交替は容易に起こり得る。また、Taverdet (1973:322) はフランス語では[r]>[z]>ϕ が起きると述べている。さらに、Régnier (1979:88) によると、モルヴァンでは[r]と[l]の調音は容易に混同されるという。以上のことから、[ʃɛ:l][ʃɛ:][se:][sɛl][se:l]は chaise を表すと判断した。

両コーパスは、地点 I、H、G、C、D、E、A で[ʃ]に一致していた。

地点	コーパス	chaise	char	chemin
I	PM	[ʃɛ:z]	[ʃɛ:r]	[ʃmɛ̃]
	ALB	[ʃɛ:r]		-
H	PM	[ʃɛ:z]	[ʃɛr]	[ʃmi]
	ALB	[ʃɛz]	[vwɛty:r]	
G	PM	[ʃɛ:z]	[ʃjɛr]	[ʃmi]
	ALB	[ʃɛz]	[ʃær]	
C	PM	[ʃɛ:z]	[sar]	[ʃmɛ̃]
	ALB	[ʃɛ:l]	[se:r]	[smɛ̃]
J	PM	[se:l]	[sejo]	[ʃmɛ̃]
	ALB	[se:]		[ʃmɛ̃ɲ]
D	PM	[ʃɛ:l]	[sejo]	[ʃmɛ̃]
	ALB	[ʃɛ:z]		[smɛ̃ɲ]
B	PM	[ʃɛ:]	[sejo]	[ʃmɛ̃]
	ALB	[ʃɛ:] [sɛl]	[ʃɛjo]	[smɛ̃]
F	PM	[sje:z]	[sjar]	[smi]
	ALB	[ʃɛ:r]	[sja:r] [sa:rɔt]	
E	PM	[ʃɛ:z]	[sja:r]	[ʃmɛ̃]
	ALB		[sje:r]	[smɛ̃ɲ]
A	PM	[ʃɛ:z]	[sjã:r]	[ʃmɛ̃]
	ALB		[sje:r]	[smɛ̃ɲ]

[ʃ] ■、[ʃj] ■、[s] ■、[sj] ■

(chariot ■、charrette ■、voiture ■、記載なし ■ は扱わない)

表 7 語源に CA-を持つ 3 地図の形態

¹⁴ フランス語の発音は大賀他(1988)を参照。以下同様。

char

Zink (1991:116)によれば、ラテン語 CARRU(M)は、以下のように変化したという。ラテン語 CARRU(M)>5 世紀 [kjaru]>[ʃarro]>7 世紀 [tʃar]>13 世紀 [ʃar]> 17 世紀 [ʃaʁ]。

両コーパスは、地点 I で[j]に、地点 C で[s]に、地点 F、E、A で[sj]に一致していた。[s]と[sj]は、フランス語における char の音声変化には見られない。

chemin

Zink (1986:117)によれば、ガリア語 CAMMĪNU(M)が語源である。CAMMĪNU(M)の語頭の CA-は次のように変化したという。5 世紀 [kia]>[ʃe]>7 世紀 [tʃe]>11 世紀[tʃə]>13 世紀 [ʃə]。

両コーパスは、地点 H、G で[j]に、地点 F で[s]に一致していた。[s]は、フランス語における chemin の音声変化には見られない。

b. 語末の-CCA

【単語の観察】

地点記号	コーパス	bouche	vache
I	PM	[buʃ]	[vɛʃ]
	ALB	-	
H	PM	[buʃ]	[vɛʃ]
	ALB	-	
G	PM	[buʃ]	[vɛʃ]
	ALB	-	
C	PM	[bus]	[vɛs]
	ALB	[bwɛs]	
J	PM	[bwɪs]	[vɛs]
	ALB		
D	PM	[bus]	[vɛs]
	ALB	[bys]	
B	PM	[bwɛs]	[vɛs]
	ALB	[bys]	
F	PM	[bwɛs]	[vɛs]
	ALB	[bwɛs]	
E	PM	[bus]	[vɛs]
	ALB	[bys]	
A	PM	[bus]	[vɛs]
	ALB	[bys]	

[j] ■、[s] ■、(記載なし ■ は扱わない)

表 8 語源に-CCA を持つ 2 地図で見られる形態

bouche

Fouché (1969:232)によれば、ラテン語 BŪCCA は以下のように変化したという。ラテン語 BŪCCA>古仏語[bofe]>[buʃ]。

両コーパスは、地点 C、D、J、B、F、E、A で[s]に一致していた。[s]は、フランス語における bouche の音声変化には見られない。

vache

Zink (1991:116)によれば、ラテン語 VACCA は以下のように変化したという。ラテン語 VACCA>5 世紀 [vakkja]>[vattja]>6 世紀 [vatʃa]>7 世紀 [vatʃə]>13 世紀 [vaʃə]>[vaʃ]。

両コーパスは、地点 I、H、G で[j]に、地点 C、D、J、B、F、E、A で[s]に一致していた。bouche と同様に、[s]はフランス語における vache の音声変化には見られない。

【同じ語源を持つ単語グループの分析】

図 4 を見ると、語頭の CA-と語末の-CCA は、北東部(地点 I、H、G)で[j]●と発音されていた。また、語末の-CCA は南西部一帯(地点 C、J、D、B、F、E、A)で[s]●と発音されていた。

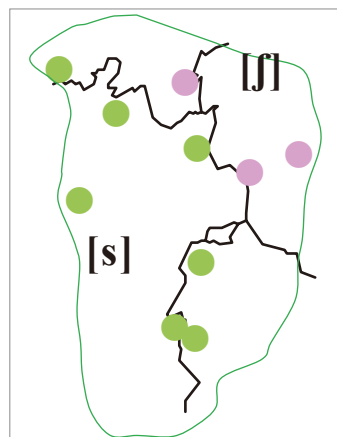
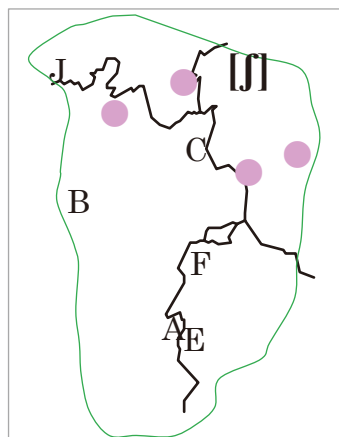


図 4 語頭の CA-の音声分布 図 5 語末の-CCA の音声分布

以上の分析から、語頭の CA-と語末の-CCA は、モルヴァンの北東部では同一の音声変化が起きたが、南西部では同じ音声変化が起きていなかった。

Dauzat(1922, 松原・横山訳, 1958, p.226-229)は、かつて *a* の前の *c* は地方によって 2 つの型の口蓋化が起きたと言う。1 つは古フランス語の *tch* で、*tch*>*ch* と変化した。もう 1 つは *ts* で、リムザン方言、オーヴェルニュ方言、フランコプロヴァンス語に残り、時には *ts*>*s*, *st* という音声変化もあったという。彼は、モルヴァン南西部における *s* の孤立島(*vache* を *vas* と発音する)と、アルデンヌとマルヌにおける痕跡から、昔は *ts* がブルゴーニュ地方とシャンパーニュ地方のほとんどを覆っていたと主張する。モルヴァン南西部には *ts*>*s* と変化した結果の[s]が残存し、他の地域は *ch*[j]に駆逐されたと考えられる。

(2) 語末の-SIONE(M)

【単語の観察】

地点	コーパス	maison	toison
I	PM	[ma:ʒõ]	[tu:ʒõ]
	ALB	[ma:ʒõ]	
H	PM	[ma:jõ]	[to:jõ]
	ALB		[to:ʒõ]
G	PM	[ma:jõ]	[to:jõ]
	ALB		
C	PM	[ma:ʒõ]	[tu:ʒõ]
	ALB	[ma:jõ]	[twe:ʒõ]
J	PM	[ma:jõ]	[tu:ʒõ]
	ALB	[ma:ʒõ]	[tweõ]
D	PM	[ma:ʒõ]	[tu:ʒõ]
	ALB	[ma:ʒõ]	
B	PM	[ma:jõ]	[to:jõ]
	ALB		
F	PM	[ma:jõ]	[to:jõ]
	ALB		
E	PM	[ma:jõ]	[to:jõ]
	ALB		
A	PM	[ma:jõ]	[to:jõ]
	ALB		

[ʒõ] ■、[jõ] ■、[õ] ■

表 9 語源に-SIONE(M)を持つ 2 地図の形態

maison

Fouché (1966:811) と Léonard (1999 :85) によれば、ラテン語 MANSIONE(M) は以下のように変化したという。ラテン語 MANSIONE(M)>BC1 世紀 [masio:ne]>3 世紀 [majsjone]>4 世紀 [majzjone]>7 世紀 [majzoun]>12 世紀 [mezõn]>17 世紀 [mezõ]。

両コーパスは、地点 I、D で[ʒõ]に、地点 H、G、B、F、E、A で[jõ]に一致していた。[ʒõ]と[jõ]は、どちらもフランス語における maison の音声変化には見られない。

toison

Fouché (1969:434, 1966:921) によれば、ラテン語 TONSIONE は以下のように変化したという。ラテン語 TONSIONE>TOSIONE>*[tojdzõn]>[twazõ]。

両コーパスは、地点 I、C、D で[ʒõ]に、地点 G、B、F、E、A で[jõ]に一致していた。

maison と同様に、[ʒõ]と[jõ]はどちらもフランス語における toison の音声変化には見られない。

【同じ語源を持つ単語グループの分析】

図 6 を見ると、語源-SIONE(M)は、地点 I、C、D で[ʒõ]●、地点 H、G、B、F、E、A で[jõ]●と発音されていた。

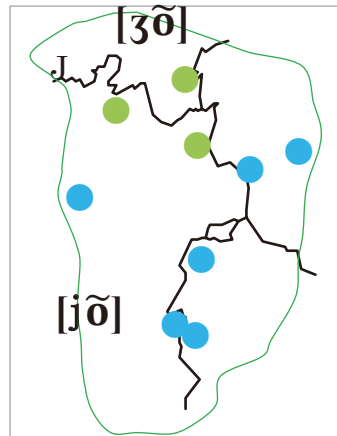


図 6 語末の-SIONE(M)の音声分布

この分析から、語末の-SIONE(M)もモルヴァンで同一の音声変化を経ていないことがわかった。中央北部では口蓋化した[ʒõ]に音声変化し、南部一帯ではより強い口蓋化が起こり接近音の[jõ]に変化していた。Taverdet (1973:322)もモルヴァンにおける強い口蓋化([z]>[j])の例として、maison [ma:jõ]を挙げている。

(3) 語頭の GL-

【単語の観察】

語頭の GL-が音声変化した音声[gj][gjj]を、本研究ではどちらも口蓋化して[-j]となったとする。

glace

Fouché (1966 : 684)によれば、ラテン語 GLACIE(M)は、ラテン語 GLACIE(M)>[glas]と変化したという。。

両コーパスは、地点 I、H、G では口蓋化して[-j]になった[gj][gjj]で一致し、地点 C、B、E、A ではより強く口蓋化した接近音[j]で一致していた。全ての地点で口蓋化が起き、[gl]の音声は見られなかった。

gland

Fouché (1966 : 684)によれば、ラテン語 GLANDE(M)は、ラテン語 GLANDE(M)>glande>[glã]と変化したという。

地点	コーパス	glace	gland
I	PM	[g ^j ɛs]	[g ^j ã]
	ALB	[g ^j jɛs]	[g ^j jã]
H	PM	[g ^j ɛs]	[ɛg ^j ã]
	ALB	[g ^j jɛs]	[g ^j jã]
G	PM	[g ^j ɛs]	[ɛg ^j ã]
	ALB	[g ^j jɛs]	[ɛg ^j jã]
C	PM	[jas]	[ɛjã]
	ALB	[jes]	[g ^j jã]
J	PM	[jas]	[g ^j ã]
	ALB	[g ^j jɛs]	[jã]
D	PM	[jas]	[ɛjã]
	ALB	[g ^j jɛs]	-
B	PM	[jes]	[ɛjã]
	ALB		[ɛjã]
F	PM	[jes]	[jã:do]
	ALB	[g ^j jɛs]	[jãdo]
E	PM	[jes]	[ɛjã]
	ALB		[ajã]
A	PM	[jes]	[ɛjã]
	ALB		[jã]

[g^j][g^jj] ■、[j] ■ (記載なし ■ は扱わない)

表 10 語源に GL-を持つ 2 地図の形態

Régnier(1979:76)は、表 10 の地点 F の両コーパスで見られる[jã:do][jãdo]の様な形態は、gland に指小辞を付与した *glandet であると述べていることから、本研究でもこれを gland として分析する。[j]は[g^jl]の口蓋化が進んだ音声である。次に、[ɛ][e]が先行した形態[ɛg^jã][eg^jã][ɛjã][ejã]について考察すると、Régnier(1979:76)は PM の[ɛg^jã][ɛjã]は女性形定冠詞[lɛ]の語末音[ɛ]が gland に膠着した結果であると説明する。その理由として、gland は以前は女性形名詞だったからであると述べる。Bertrant(1979:34)は gland として eilland という形態を掲載し、『モルヴァン方言語彙集』(De Chambure 1878 :286)は、モルヴァンでは gland の意味で « eillan » が使われると述べている。以上のことから、[ɛg^jã][eg^jã][ɛjã][ejã]は gland を表す形態と考える。地点 E の ALB で見られる[ajã]の語頭[a]も同様に女性形定冠詞が膠着したものか確かめるために、ALB の地図 XII:la(vache)で女性形定冠詞の形態を見ると、地点 E では[la]ではなく[lɛ]と発音されていた。しかし、[a]と[ɛ]の開口度が近いことから、[ajã]も女性形定冠詞の語末音が膠着した形態で、gland を表していると考えた。

両コーパスは、地点 I、H、G で[g^j][g^jj]に一致し、地点 B、F、E、A で強く口蓋化された

[j]の音声に一致していた。全ての地点で口蓋化が起きて、[gɫ]はなかった。

【同じ語源を持つ単語グループの分析】

語源の GL-は、地点 I、H、G で口蓋化して[-j]となった[gʲ][gʲj]●、地点 C、B、F、E、A では接近音[j]●と発音されていた。

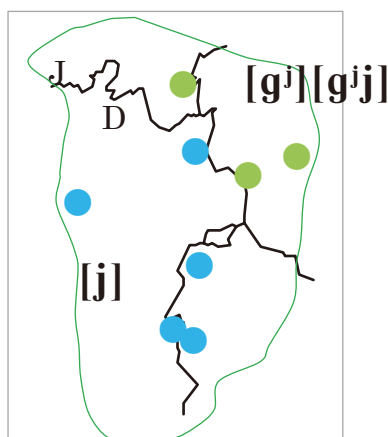


図 7 語頭の GL-の音声分布

語頭の GL-は全地点で口蓋化が起きていたが、地域によって口蓋化の程度が異なっていた。北東部では口蓋化して[-j]となった形態[gʲ][gʲj]に変化し、南西部では語頭子音[g]を失い、口蓋化の最終段階を表すと考えられる接近音[j]に変化している。調音点と調音方法が同じ語頭の KL-を語源に持つ単語グループと比較する必要があるが、本研究では比較できなかった¹⁵。

(4) 語頭の PL- (5)語頭の BL-

【単語の観察】

pluie

Fouché (1966 : 684)によれば、ラテン語 PLŪVIA は、ラテン語 PLŪVIA >*pluia>[plɥi]と変化したという。

両コーパスは、地点 G、C、J で[pɫ]に一致し、地点 I、H、D、F、E、A で口蓋化して[-j]となった[pj]に一致していた。

plume

Fouché (1966 : 684)によれば、ラテン語 PLŪVIA は、ラテン語 PLŪMA>[plum]と変化したという。

両コーパスは、地点 G、J で[pɫ]に一致し、地点 I、D、B、F、A で口蓋化して[-j]となった[pj]に一致していた。

¹⁵ 2つの言語地図には地図 *clair*、*clochette* が含まれているが、他の単語の形態が記載されていたことから、語頭の KL-から変化した音声进行分析出来なかった。

地点	コーパス	pluie	plume	blanche	blé
I	PM	[pjø:]	[pjœm]	[blãʃ]	[bjɛ]
	ALB			[bjãʃ]	[frumã]
H	PM	[pjø:]	[pjœm]	[bjẽ:ʃ]	[bjɛ]
	ALB		-		
G	PM	[plø:]	[pløm]	[blẽʃ]	[blɛ]
	ALB		[plœm]	[blã:ʃ]	
C	PM	[plø:]	[pløm]	[blãʃ]	[frumã]
	ALB		-		[bjɛ]
J	PM	[plø]	[pløm]	[blãʃ]	[ble]
	ALB	[plø:]	[plœm]	[blãʃ]	[frumã]
D	PM	[pjø:]	[pjœm]	[bjãʃ]	[bjɛ]
	ALB				
B	PM	[pqi:]	[pjœm]	[bjãʃ]	[bjɛ]
	ALB	[pjø:]		[bjãʃ]	
F	PM	[pjø:]	[pjœm]	[bjẽʃ]	[frômã]
	ALB				[fromã]
E	PM	[pjø:]	[pjœm]	[bjãʃ]	[frômã]
	ALB		-		[fromã]
A	PM	[pjø:]	[pjœm]	[bjãʃ]	[frômã]
	ALB			[blãʃ]	

[pl][bl] ■、[pj][bj] ■、[p] ■ (froment¹⁶ ■、記載なし ■ は扱わない)

表 11 語源に PL-/BL-を持つ 4 地図の形態

blanche

Fouché (1966 : 683)によれば、フランス語で「白い」を表す形容詞の男性形 blanc はゲルマン語*BLANK から以下のように変化したという。ゲルマン語*BLANK>*blancu>[blã]。女性形 blanche の語頭子音もこれに準ずる。

両コーパスは、地点 G、C、J で[bl]に一致し、地点 H、D、B、F、E で口蓋化して[-j]となった[bj]に一致していた。

blé

Fouché (1966 : 683)によれば、古フランク語 *BLĀD は、古フランク語*BLĀD>*bladu>[ble]と変化したという。

¹⁶ Taverdet et Navette-Taverdet (1991:77) によれば、ブルゴーニュ地方の特にモルヴァンと南部のブレスでは、blé の意味で froment が使われるという。

両コーパスは、地点 G で[bɫ]に一致し、地点 H、D、B で口蓋化して[-j]となった[bj]に一致していた。

【同じ語源を持つ単語グループの分析】

図 8 を見ると、語源 PL-/BL-は、地点 G、C、J で[pɫ][bɫ]●、地点 I、H、D、B、F、E、A で口蓋化された[pj][bj]●が発音されていた。

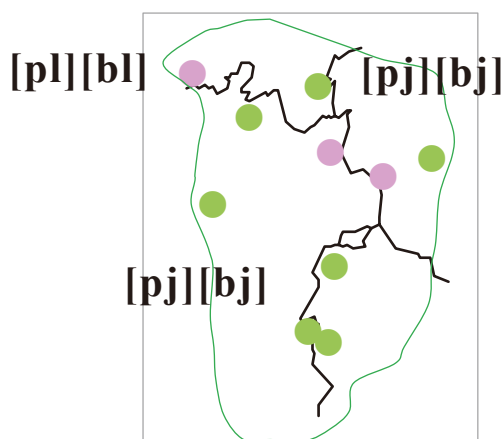


図 8 語頭の PL-/BL の音声分布

北西部と中央部では口蓋化していない[pɫ][bɫ]が見られるが、北東部と南西部では口蓋化した[pj][bj]が分布している。このように、語頭の PL-/BL-は、同じ音声特徴と音声分布を持っていた。語頭子音[p][b]はどちらも両唇破裂音で調音点と調音方法が同じことから、地域によって同様な音声変化を経たと考える。

語源が「語頭子音+[ɫ]」の構造を持つ GL-と PL-/BL-を、図 7 と図 8 で比較すると、北東部ではどちらも口蓋化して[-j]となっていた。一方、南西部では PL-/BL-は同様に[-j]となったが、GL-は語頭子音を失って接近音[j]に変化していた。接近音[j]への変化は GL-だけで見られる。また、PL-/BL-は[ɫ]を伴う[pɫ][bɫ]も見られるが、GL-は[ɟɫ]は発音されていない。以上のことから、GL-は PL-/BL-よりも口蓋化が進んでいた。

おわりに

本研究では、同じ語源を単語の中で音節的に同じ位置に持つ 13 単語について音声分析を行った。その結果、リサーチクエスチョン「①同一語源から同一の音声変化を経たのか、あるいは異なる音声変化を経たのか？ ②音声変化を被った地域はどこで、どのような地理的分布の特徴があるか？」について以下の結果を得た。

①については、モルヴァンでは同一語源から同一の音声変化を経ていないことがわかった。すなわち、音声変化はモルヴァン全体では共通性はない。②については、音声変化を被った地域と地理的分布には以下のような特徴が観察された。

- 語頭の CA- [ɟ]: 北東部

- 語末の-CCA [ʃ]: 北東部、 [s]: 南西部一帯
- 語末の-SIONE(M) [ʒõ]: 北部、 [jõ] 南部
- 語頭の GL- [gʲ][gʲj]: 北東部、 [j]: 南西部
- 語頭の PL-/BL- [pl][bl]: 北西部と中央部、 [pj][bj]: 北東部と南西部

語頭の CA-と語末の-CCA は、北東部ではどちらも[ʃ]と発音されていた。しかし、南西部では語頭の CA-は音声変化に一貫性が見られず、語末の-CCA は[s]に変化していた。南西部で見られる[s]は、かつてブルゴーニュ地方とシャンパーニュ地方を覆っていた *ts* から変化した結果である可能性がある。語末の-SIONE(M)は中央北部では口蓋化して[ʒõ]に音声変化して、南部一帯ではより強く口蓋化して[jõ]と変化していた。語頭の GL-はモルヴァン全体で口蓋化して、南西部では口蓋化の最終段階と考えられる[j]に至っていた。語頭の PL-/BL-は同じ音声特徴と分布が見られた。これは、語頭子音[p][b]の調音点と調音方法が共通していることと関係している可能性があるが、確かめるためには扱う語源を増やしたさらなる分析が必要である。GL-は PL-/BL-よりも口蓋化の段階が進んでいた。

次の語源と地域では、音声変化に一貫性が見られなかった。

- 語頭の CA- 南西部
- 語末の-SIONE(M) 北西部
- 語頭の GL- 北西部

上記地域では、各地点の音声の揺れがあったことや、同じ単語グループに属する単語でも地域によって別々に音声変化したと考えられる。Régnier (1979a: 185-186) も、単語は地域によって別々に育まれたと述べている。

以上のように、モルヴァン全体では同一の語源が同一の音声変化を経ていなかった。一方、音声分布には地域性が見られた。また、語源によって地理的分布に特徴があった。さらに、語源によって音声変化に一貫性が見られない地域が認められたが、その理由として、該当地域では音声に揺れがあったこと、また同じ語源を持つ単語が地域によって別々の音声変化を経たことが考えられる。

今後は動詞なども調査対象に加えて、本研究で扱わなかった語源を持つ単語についても音声分析を行い、20 世紀中期のモルヴァンの音声特徴と音声分布をより詳細に明らかにしたい。

参考文献

- BERTRANT, Paule.(1979), *Les parlers du Morvan III, Transcription des forms en orthographe française*, Château-Chinon : Académie du Morvan.
- DAUZAT, Albert.(1922), *La Géographie Linguistique*, Paris : Librairie ERNEST, 『フランス言語地理学』 松原秀治, 横山紀伊子訳 (東京: 大学書林, 1958年).
- DE CHAMBURE, Eugène. (1878), *Glossaire du Morvan; étude sur le langage de cette contrée comparé avec les principaux dialectes ou patois de la France, de la Belgique wallonne, et de la Suisse romande*, Paris: H. CHAMPION, LIBRAIRE, Autun: DEJUSSIÉU PÈRE ET FILS.

- FOUCHÉ, Pierre (1966). *Phonétique historique du français, Volume III, Les consonnes et index général, 2e éd., rev. et corrigée*. Paris : Klincksieck.
- FOUCHÉ, Pierre (1969). *Phonétique historique du français, Volume II, Les voyelles, 2e éd., rev. et corrigée*. Paris : Klincksieck.
- LÉONARD, Monique. (1999), *Exercices de Phonétique Historique*, Paris : Éditions Nathan.
- REGNIER, Claude.(1979a), *Les parlers du Morvan I*, Château-Chinon : Académie du Morvan.
- REGNIER, Claude.(1979b), *Les parlers du Morvan II*, Château-Chinon : Académie du Morvan.
- TAVERDET, Gérard.(1973), *Patois et français régional en Bourgogne, Ethnologie française 3,3-4. 1973*, Paris : Centre d'ethnologie française.
- TAVERDET, Gérard.(1975), *Atlas Linguistique et ethnographique de la Bourgogne I*, Paris : Éditions du Centre national de la recherche scientifique
- TAVERDET, Gérard.(1977), *Atlas Linguistique et ethnographique de la Bourgogne II*, Paris : Éditions du Centre national de la recherche scientifique
- TAVERDET, Gérard.(1980), *Atlas Linguistique et ethnographique de la Bourgogne III*, Paris : Éditions du Centre national de la recherche scientifique
- TAVERDET, Gérard. et Navette-Taverdet, D. (1990), *Dictionnaire du français régional de Bourgogne*, Paris : Éditions.
- ZINK, Gaston. (1991), *Phonétique historique du français, 3^e édition, 1^{re} édition mise à jour 1986*, Paris : Presses Universitaires de France.
- 大賀 正喜他 1988 『小学館ロベール 仏和大辞典』 東京:小学館.
- FEW = WARTBURG, Walther von (1922-2002). *Französisches Etymologisches Wörterbuch. Eine darstellung des galloromanischen sprachschatzes (Vols. 1-25)*. Bonn/ Heidelberg/ Leipzig-Berlin/ Basel : Klopp/ Winter/ Teubner/ Zbinden.
- <https://apps.atilf.fr/lecteurFEW/> (最終閲覧日 2019年11月22日)